ポケモン不思議のダンジョン～雫の探検隊～

猪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ポケモン不思議のダンジョン～雫の探検隊～

【Ｎコード】
Ｎ２０７６Ｚ

【作者名】
猪

【あらすじ】
ゼニガメとなり記憶も無くした元人間のシズクに、気弱だが心優しく正義感が強いヒノアラシのエン。ひょんなことで出会ったこの二人は　、探検隊になるべくギルドに弟子入りする。しかしそんな二人を待ち受けていたのは、時と闇をめぐる壮大な冒険だった。
猪が執筆する、ポケダン二次創作小説第２弾！！

プロローグ（前書き）

こんにちは、作者の猪（いのしし）です。ポケダン二次創作小説第2弾幕開けです。相変わらず低い文章力ですが、こちらも最後までお付き合いいただければ幸いです。

プロローグ

「うわっ！！！」

「！！だ…大丈夫か！？」

痛い、ものすごく痛い。

目の前が…ぼやけてきた…。

「し、しっかりしろ！！手を離すなよ！！」

「うう……」

「うん」って言いたかったのに……うめき声しか出ない……

「……終わりだ。」

！！あいつ、手に力が集まって……まずい、このままじゃ……！！

「手を……離して……。君まで……巻き込ま……れる……」

よかった、声が出た…。

「だめだ！！お前を見捨てるもんか！！」

なっ！！道連れになるつもり！？

だ、だめだよ！！君まで巻き込むわけには……だって君は、僕の…

大切な……

「死ねっ！！」

！！もう、時間がない…！！

「離……すんだ！！」

「なっ！！」

……ごめん、突き飛ばしちゃったね。でもよかった…あいつの攻撃が当たらなくて……。

……何か…叫んでる？でも、聞こえない…何て言ってるんだろう？

……意識が…遠のいて……い……く……

……ここは……どこだろう……？

……波の音が……聞こえる……。

……どこかの……浜辺かな……？

……だめだ……また……意識が……

プロローグ（後書き）

はい、短いです（笑）

「葉の救助隊」を読んだ方なら、この始まり方には見覚えがあると思います。別に意識したつもりはありません。

……正直に言えば、他に始まり方が思い付きませんでした（泣）

ゼニガメとヒノアラシ（前書き）

ようやく第2話の投稿ができました。ちょっと考える時間長すぎたかな…？

シズク「関係ないけど、作者昨日テストが終わったんだよね？」

そうだけど、それが何か？

エン「どう？赤点とる自信は？（笑）」

な、なぜそんなことを聞く！？エンよ！？

エン「だって作者、テスト休み中勉強すっぽかして小説書いてばかりだったみたいだし（笑）」

シズク「だから、作者の答案はぼろぼろなんじゃないかと思って心配してあげたんだよ（ニヤリ）」

くっ、そんな笑みを浮かべて白々しい……

（前にも言ったような気がするが…）ここではテストの話は禁止ね。

ゼニガメとヒノアラシ

「……すごい嵐……。」

切り立った崖の中腹にある空洞で、あるポケモンがつぶやいた。その崖は、外から見るとサメの頭部に酷似しており、ちょうどその口に当たる部分に空洞がある。

「なんだか……嫌な予感がする……。」

ポケモンがさらに言った。そのポケモンは、丸い顔から突き出た少し長めの鼻に丸い胴体、手は小さく足は太めで前かがみだが二足歩行、頭から背中にかけては青い、お腹から顔にかけてはうすい黄色の毛に覆われ、最後に背中には炎を出すための穴が四つ空いている。ヒノアラシだ。

ヒノアラシは誰かに話しているわけではなく、独り言を言っていたようだ。

その時、すぐ近くに雷が落ち、轟音を響かせた。

「ヒャアアアアア！！」

ヒノアラシは驚いて、悲鳴をあげながらしりもちをついた。

「び、びっくりした〜〜〜〜……。」

立ち上がり顔をしかめた。

「こんな日はもう寝よう……。」

そう言ってヒノアラシは、背後に敷いてある干し草のベッドに向かった。

翌日の朝――――
昨晩の嵐が嘘のように晴れ、暖かい陽気が降り注いでいた。

「……。」

そんな中、昨晩のヒノアラシが小さなウェストバッグをつけて、緊張した表情である場所に向かっていた。
着いた場所は、小高い丘の上にあるテントだった。そのテントは、丸くてピンク色の身体、頭からは二本のウサギのような耳が生え、大きな丸い目をしたあるポケモンをモチーフにしたものだった。そのテントの前には格子が張られた穴があった。

「……。」

ヒノアラシは緊張した表情のまま、その穴の前まで行くと、しばらく硬直した。
硬直を解くと、ヒノアラシはため息をついて言った。

「やっぱりだめだ……今日こそはって思ったんだけど……踏ん切りがつかないや。」

しばらく考えたあと、突然何かを振り払うかのように頭を振って言った。

「こんなんじゃだめだ！！いつまでも弱虫のままじゃ！！」

そのあとヒノアラシは、ウェストバッグを開けて、その中から小さな石のかけらを取り出した。その石のかけらは円錐形で、底面にあたる部分に不思議な幾何学模様が描かれていた。

それを見ながらヒノアラシは言った。

「今日はボクの……宝物まで持ってきたんだから！！」

ヒノアラシはバッグにそれをしまい、そのあと大きく足を振り上げた。

「この宝物がボクに勇気をくれる……そう信じて……！！」

そして足を勢いよく落とす。

「大きな一歩を踏み……」

そこまで言った時だった。

落とした足が格子を張った穴の上についた。

その瞬間、

「ポケモン発見！！ポケモン発見！！」

突然穴の下から大きな声が聞こえてきた。

「誰の足形？誰の足形？」

聞き返すようなまた別の大声が聞こえた。

「足形は……」

「ヒャアアアアア！！！」

あまりにも驚いたヒノアラシは、鋭い悲鳴を発しながら、真後ろを向いて一目散に逃げていった。

「……おい、あいつが持ってたやつ、見たか？」

「ああ。宝物とか言ってたな。」

その様子を陰から見ていたポケモンが二人いた。一人は紫色の丸い身体、足はなく身体の側面に空いた穴からガスを出して宙に浮いている。もう一人は青いコウモリのようなポケモンで、目はなく大きな口に牙がある。ドガースとズバットだ。

「……狙うか？」

ドガースがズバットに聞いた。

「ああ、あいつも弱そうだしな。」

ズバットがニヤリとして答えると、二人はヒノアラシの後を追った。

「……う……ん……」

そのころここは、先ほどの場所からほど近い海岸。そこに倒れてい

た一人のポケモンが目をさました。

「……海岸か。一体どこの……」

そう言ってポケモンは身体をわずかに起こした、その時、

「……ァァァァァァァ！！」

「？……ぐふっ！！？」

突然聞こえてきた奇声にポケモンが横を向いた瞬間、何かが顔面に激突した。

「あっ！！わああぁぁ～～～～！！」

激突したのは、先ほどのヒノアラシだった。そのヒノアラシはそのまま勢い余って砂浜を転がった。そしてようやく止まると、頭をさすって起き上がった。

「う～ん、いたたた……あっ！！」

ヒノアラシは自分がつまづいた場所をみて、目の前で倒れている――顔面にぶつかられ再び意識を失った――ポケモンに気付き、急いで駆け寄った。

「ちょっと！キミ…大丈夫？」

ポケモンは今度はすぐに意識を取り戻し、顔を押さえながら起き上がった。

「うぅ、顔が痛い……。」

「ご、ごめん、ボクがぶつかったから……。」

ヒノアラシが謝った。

「気をつけてよ……っ！？」

ポケモンはヒノアラシを見た途端、驚愕の表情をした。

「どうしたの？」

不思議そうな表情をしながらヒノアラシが聞くと、ポケモンが言った。

「ヒ、ヒノアラシが…しゃべった！？」

その言葉にヒノアラシはさらに不思議そうな表情をし、

「？…ボクがしゃべるのが、そんなに不思議？」

と言った。

するとポケモンは今度は眉をひそめた。

「え？ポケモンが話すのは普通なのかい？」

「うん。そもそもゼニガメのキミも、しゃべってるじゃん。」

この言葉を聞き、ゼニガメと呼ばれたポケモンは驚愕して身体中を見渡した。

彼の目には、水色の手足、胸部から腹部にかけて丸い甲羅状のもの、さらに後ろを向いて下を見ると、水色の尻尾が見えた。

「……うそだろ……」

ゼニガメは信じがたそうに波打ち際に行き、水面に映る自分の顔を見た。そこには水色の丸い顔が映った。その顔が認識できてくると同時に、大きな目に驚きの色が浮かんでいき、そして叫んだ。

「僕……ゼニガメに……なってる！！」

そのことがまだ信じられないゼニガメは、再び身体中を見渡し、さらに頬をつねり、夢じゃないことを確かめた。
そんなゼニガメに、ヒノアラシは探るような目つきで尋ねた。

「キミ、なんか怪しい……ボクのことだまそうとしてる？」

その言葉に、ゼニガメはヒノアラシの目を見て答えた。

「いや、そんなつもりはないよ。」

「じゃあ、名前はなんていうの？」

ヒノアラシの問いにゼニガメが答えようとした。しかし、

「僕の名前は……っ！！君、後ろ！！」

ゼニガメは突然叫んだ。ヒノアラシの背後にいる悪意に満ちた表情を浮かべる二人のポケモンに気付いたからだ。

「えっ？」

ヒノアラシは振り返ろうとしたが、その前に二人のポケモンは行動を起こした。

「くらえ、“体当たり”！！」

そう言ってヒノアラシに突っ込んだポケモンは、先ほどのドガースだ。

「あっ！！」

その衝撃でヒノアラシはバランスを崩した。しかし彼が倒れる前に、同じく先ほどのズバットが彼のウェストバッグに向かって飛び付いた。

「へへっ、いただくぜ！！」

そう言ってズバットは、ヒノアラシからバッグをひったくり、それと同時にヒノアラシはうつ伏せに倒れた。

「いたたたた……あっ！！」

起き上がったヒノアラシは、バッグをとられたことに気付き、ドガースとズバットを見た。二人はそれを見て、いやらしい笑みを浮かべた。

「それボクの宝物！！返して！！」

ヒノアラシがそう言うと、ドガースは、

「返してほしければ、力ずくで取ってみな。」
と言った。その言葉を聞くと、ヒノアラシは震えだした。
その様子を見ると、今度はズバットが言った。
「やっぱり弱虫みたいだな。見た目通りだ。」
すると二人は、いやらしく笑いながら背後にある洞窟に向かった。
「あばよ、弱虫くん。」
ドガースが去り際にそう言うと、二人は高笑いをしながら洞窟の中に消えていった。
「……うううぅ……」
ヒノアラシはその場に座り込み、泣きそうな顔をした。そんな彼に一連の出来事を見ていたゼニガメが、声をかけた。
「君、このままでいいのかい？悔しくないのかい？」
その言葉にヒノアラシはか細い声で答えた。
「悔しいよ……あんなこと言われて……宝物まで盗られて……」
ゼニガメがさらに言った。
「だったら追いかけて取り返せばいいじゃん。」

ヒノアラシはまた答えた。

「でも……ボク一人じゃ……あいつらは二人だし……勝てないよ。」

「そんなのやってみなきゃ分からないよ。」

ゼニガメがさらに言ったが、今度はヒノアラシは返さずに、うずくまってとうとう泣き出してしまった。

その様子を見たゼニガメは、ため息をつくと、ある提案をした。

「じゃあ僕が手伝ってあげるよ。それなら二対二だから、君の勝率も上がるだろ？」

その言葉を聞いた途端、ヒノアラシは涙が浮かぶ目で、ゼニガメを見た。

「何で見ず知らずのキミが？」

ゼニガメは答えた。

「君は僕のことを疑ってたから……信じてもらおうと思ってね。それに……」

ここでゼニガメは、少し顔をしかめた。

「僕もあの二人になんだか腹が立ってね。」

するとヒノアラシは立ち上がり、涙を浮かべながらゼニガメに言った。

「あ、ありがとう。そんなこと言う君が悪いポケモンのはずないよね。さっきまで疑っててごめん。キミは、えっと……」

ゼニガメはここで、さっき自己紹介を中断したことに気付いた。

「ああ、そういえば名乗ってなかったね。僕はシズク、穿雫（ウガチシズク）よろしくね。」

そう言ってシズクと名乗ったゼニガメは、手を差し出した。するとヒノアラシは、

「ボクはエン。よろしく！！」

と言って、シズクの手を握った。

シズクはそのあと、後ろの洞窟の方を向き、言った。

「じゃあ、行こうか。」

ゼニガメとヒノアラシ（後書き）

シズク「随分長かったね。」

うむ…（汗）思いのほか長くなってしまった。

エン「第一章終わるのにどれくらいかかるかな？」

ま、まあ、それはやってみなきゃ分からん（汗）

こんな調子ですが、これから先もお楽しみに♪

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2076z/

ポケモン不思議のダンジョン〜雫の探検隊〜

2011年12月10日23時47分発行